

フッサールの現象学的心理学の深化 (1925 ~ 1928)

著者	堀 栄造
雑誌名	筑波哲学
号	23
ページ	9-24
発行年	2015-03-31
その他のタイトル	Die Vertiefung der Husserlschen phanomenologischen Psychologie (1925 ~ 1928)
URL	http://hdl.handle.net/2241/00128919

フッサールの現象学的心理学の深化(1925~1928)

堀 栄造

序 言

本論は、エドムント・フッサールの現象学的心理学が1925年から1928年へかけてどのように深化していくのかを解明しようとするものである。第1節において、現象学的心理学の方法としての形相的ヴァリエーションをめぐる歩みを考察する。第2節において、1925年夏学期講義「現象学的心理学」の形相的ヴァリエーションについて考察する。第3節において、1927年にフッサールが形相的ヴァリエーションにおける形相の真の意義を把握したことについて考察する。第4節において、1928年の「アムステルダム講演」においてフッサールが現象学的心理学を深化させたことについて考察する。

(1) 現象学的心理学の方法としての形相的ヴァリエーションをめぐる歩み

フッサールの現象学的心理学の方法は、形相的ヴァリエーションである。そこで、形相的ヴァリエーションをめぐるフッサールの思想的発展の歩みを辿ってみよう。

フッサール全集第41巻の編者ディルク・フォンファラによれば、フッサールは、1902年5月11日付けのシュトゥンプフ宛の書簡において、低次のスペチエスと類の区別が「非常に本質的な区別」であるように思われるにもかかわらず、自己が「低次のスペチエスと類を区別しなかった」と自己批判的に述べている。さらに、フッサールは、1907年9月29日付けのテキストにおいて、一般的なものの諸段階を乗り越えて拡張するのであり、つまり、まだスペチエスという意味での一般性ではなく、まだ個体的なものを自己の下にもつにすぎないようないわゆる「最初の一般性」あるいは「最低次の一般性」であるような本質について考察するのである⁽¹⁾。したがって、フッサールは、1902年から1907年へかけて、類や種といった一般的なものの諸段階を考察し、「最初の一般性」あるいは「最低次の一般性」と呼ばれる最低段階の本質へ至ったものと言える。

また、フォンファラによれば、フッサールは、1901年から1917年へかけての時期の比較的早い頃のテキストにおいて、術語法はまだ究極的に妥当する形で固定されておらず、最低次の一般的なものは、ときおり「個体的本質[individuelles Wesen]」、「最初の一般的なもの[erstes Allgemeines]」、「想像的本質[imaginatives Wesen]」、あるいは「ファントム本質[Phantomwesen]」とも呼ばれ、のちにももちろんたいい「具体的本質[konkretes Wesen]」という用語となる⁽²⁾。この「具体的本質」こそ、アリストテレス的な意味での「形相」に他ならない。

それでは、「具体的本質」としての「形相」は、どのようにして捉えられるのか。フッサールの現象学的心理学において「具体的本質」としての「形相」を捉える方法が、「形相的ヴァリエーション」と呼ばれるものである。そうすると、フッサールは、形相的ヴァリエーションという方法を、いつ頃から使用するようになるのだろうか。フォンファラによれば、「形相的ヴァリエーション[eidetische Variation]」という術語がおそらく初めて見いだされるのは、そのうちで本質概念の形成に関する究明の際に類型的本質[typisches Wesen]と精密な本質[exaktes Wesen]の区別が基礎づけられるような1912年のテキストにおいてのことである。さらに、フォンファラによれば、その理論は、確かに1925年の現象学的心理学に関する講義において初めて説明されるが、しかし、質料的事物[*res extensa*]の分析とのつながりにおいて1912年に執筆された『イデー III』の§8における考察から、フッサールがすでにそこで事象的に見て形相的ヴァリエーションを考案し使用したということが見て取られうる⁽³⁾。したがって、フッサールは、1912年には、形相的ヴァリエーションという術語を使用するとともに、事象的に見ても使用していたものと言える。

その後、フッサールは、1917-18年のベルナウ草稿において個体化[Individuation]の問題性に没頭するのだが、フォンファラによれば、こうした研究草稿において、フッサールは、より高次の一般性つまり種や類のような一般的本質とは区別して最低次の本質ないし最初の本質つまり最下位の一般性としての具体的本質にとりわけ取り組む。そして、形相的ヴァリエーションの際の自由な空想において産出される諸可能性は、経験によって理性的に妥当するものとして予示され、それとともに経験にいわば拘束されていることが、明らかにされる⁽⁴⁾。したがって、フッサールは、1917-18年には、個体を個体として認識する経験の個体化の場面で働く形相的ヴァリエーションによって観取されるアリストテレス的な意味での形相の問題に集中的に取り組んだものと言える。

引き続いて1919年から1925年の現象学的心理学に関する講義までの時期については、フォンファラによれば、フッサールは、空想において生み出される純粋な可能性の自由なヴァリエーションによる類および種の獲得に取り組み、その際に、自己の形相的ヴァリエーションの構想が、繰り返し諸テキストにおいて適用される。そして、フッサールが1919年のテキスト⁽⁵⁾において述べている重要な点は、次のような事である。すなわち、アイデアチオン[Ideation]は、分離して取り出すこと[Heraussondern]という過程を意味するけれども、しかし、その過程を以ていかなる種や類が獲得されるのでもなく、「類型つまり或る共通なものとしてのいわば具体的に一般的なもの」が獲得されるのであり、最下位段階の一般的なものとしての具体的本質が獲得されるのであり、アイデア化的抽象[ideierende Abstraktion]という手法によって初めてより一層高次の一般性が構成されるのである。「それとともに、一般的対象(一般的本質)の把握は、すでに具体的本質の把握を前提している。より一層明確に言えば、具体的本質が、分離して取り出されねばならないのであり、それとともに、対象から一般的本質が取り出されて観取されうる」⁽⁶⁾。したがって、フッサールは、1919年には、形相的ヴァリエーションによる類および種の獲得は、アイデア化的抽象によるものであり、その前提としての具体的本質としての形相の獲得は、分離して取り出すことという過程を意味するアイデアチオンによるものであることに気づいたものと言える。

また、フォンファラによれば、フッサールは、1925年のテキストにおいて、形相的ヴァリエーションの理論の文脈において変項の限定[Variantenbegrenzung]に取り組む。その際に、変項の産出の際に逃されてはならないようなものとして、出発点となる範例の具体的本質が明示され、それとともに、それは、さらに進行するという様態における変項形成の限定に対していわば基準として機能し、それゆえ、形相的ヴァリエーションの理解にとって或る決定的役割を果たす⁽⁷⁾。したがって、フッサールは、1925年には、具体的本質としての形相が形相的ヴァリエーションにおける変項形成の限定に対して基準として機能することを捉えていたものと言える。

さらに、フォンファラによれば、1926年から『危機書』(1936年)の予備的研究へ至るまでのテキストにおいて、フッサールは、さしあたり範例的本質分析に焦点を置き、それからとりわけ「私」ないし「エゴ」という形相およびそれと密接に結び付けられた「世界」ないし「生活世界」という形相の問題性つまり自己の後期著作に特徴的な問題性の究明に焦点を置く⁽⁸⁾。そして、すでに1926年のテキストにおいて、

フッサールは、主観性と環境世界は究極的には共にヴァリエーションを施されうるにすぎないという結論つまり 1935 年のかなり晩年のテキストにおいてもなお妥当する結論を最終的に引き出す⁽⁹⁾。ちなみに、フォンファラは、こうした結論を「自我のヴァリエーションと世界のヴァリエーションに関する両者の同時発生テーゼ [Koinzidenz-These]」⁽¹⁰⁾と呼んでいる。したがって、フッサールは、1926 年には、自我のヴァリエーションと世界のヴァリエーションに関する両者の同時発生テーゼに基づく形相的ヴァリエーションを行使し始めたものと言える。

（2）「1925 年夏学期講義」における現象学的心理学の形相的ヴァリエーション

第 1 節においても言及されたように、形相的ヴァリエーションの理論が初めて説明されるのは、1925 年夏学期講義「現象学的心理学」においてのことである。そこで、これから、1925 年夏学期講義「現象学的心理学」における形相的ヴァリエーションについて考察しよう。

1925 年夏学期講義「現象学的心理学」において、フッサールは、形相的ヴァリエーションについて次のように記述している。「我々は、純粹空想の体系的形成の範例としての或る事実によって我々を導こう。それゆえ、原像[Urbild]に具体的に類似するものの全体であるような模像[Nachbilder]としての空想像[Phantasiebilder]としての常に新たな類似した像が獲得されることになる。その場合、こうした多様な模造的形成[Nachgestaltungen]によって或る統一が貫かれるのであり、つまり、類似性を基礎づける本質の統一が貫かれるのである。……我々は、自由で恣意的なヴァリエーションを行使しつつ諸変項[Varianten]を産出するのであり、それらの諸変項に対してあらゆるヴァリエーションは〈任意に〉という主観的な体験様態において現れ、他方で、ヴァリエーションそのものの過程もまたそのようにして現れる。ところで、しかし、我々は、この場合、我々が観取し洞察しうるように、それ自体絶対的に不変であるような或る不変のもの[eine Invariante]が必然性においてヴァリエーションを貫きあるいは一切の変項を貫くということに、いつでもまたまなざしを向けうる。……恣意的ヴァリエーションの行使において、ヴァリエーションの異なるもの[*das Differierende*]は我々にとってどうでもよいのだけれども、いわば諸変項の或る絶えざる一致は依然として保持されるのであり、その一致において必然的に不変でありつづけるような何かあるいは内実として或る一般的本質が依然として保持されるの

である。それゆえ、我々は、〈任意に〉という様態において行使されいつものように継続されるべきそのようなヴァリエーションにおいて必然的に不変のものとしての或る一般的本質にまなざしを向けうる。こうした一般的本質は、形相[Eidos]であり、プラトンの意味での〈イデア〉であるが、しかし、一切の形而上学的解釈を免れて純粋に把握される。それゆえ、正確に捉えれば、こうした一般的本質は、形而上学的解釈の途上で生じる理念観取[Ideenschau]において我々にとって直接的に直観的に[intuitiv]与えられる。その際に、出発点として、或る経験が考えられた。明らかに、もはや、或る単なる空想[eine bloße Phantasie]あるいは或る単なる空想において対象的に直観的に思い浮かべるもの[*das in ihr gegenständlich-anschaulich Vorschwebende*]が、同様に役立ちえたと言えよう。例えば、我々が出発点において或る音について経験し、その音を今や実際に聞いているあるいは音として〈空想の中で思い浮かべた〉とすれば、そこで、我々は、〈任意の〉諸変項の変化の中で把握された音という形相を、この場合必然的に共通のものとして獲得する。しかし、今や、我々が或る他の音の現象[Tonphänomen]を出発点として任意にヴァリエーションを施されるものとして取り上げると、我々は、その新たな〈範例〉に或る他の音の形相を把握するのではなく、新たな音の現象とかつての音の現象の概観において、それが同一のものであるということ、双方の諸変項と諸ヴァリエーションは或る唯一のヴァリエーションへ統合されるということ、諸変項はあちこちに同じ仕方で或る形相の任意の個別化[*beliebige Vereinzelnungen des einen Eidos*]であることを見て取る。そして、次のような事は、それ自体明証的である。すなわち、我々は、或る変項から新たな変項へ進行しつつ新たなヴァリエーションの多様性そのもののこうした進行と形成に再び或る任意のものという性格を与えうるということであり、こうした進行において任意性という形式で〈常に繰り返し〉同一の形相つまり音一般という同一の一般的本質が生じなければならないということである。……いつでも統一される普遍的な経験の自然な展開において、いつまでも続く普遍的存在基底としての経験的世界が我々に割り当てられるのであり、一切の我々の活動の普遍的領野として割り当てられるのである。一切の我々の習慣性[Gewohnheiten]のきわめて確固たる普遍的な活動において、世界は、我々にとって妥当し、我々がいかなる関心を追い求めようとも、目下の妥当性において我々にとって依然として存する。一切の関心と同様に、形相的認識の関心もまた、世界に関係づけられるのであり、あらゆる空想活動の場合にそうであり、かくしてまたあらゆる空想ヴァリエーション[Phantasievariation]の場合

にそうである。或る理念観取[Ideenschau]への志向とともに、世界は共に措定され、あらゆる事実とあらゆる形相は依然として事実的世界に関係づけられ、何らかの仕方
 方で世界に属している。例えば、我々は、自然的態度において、まさしくその普遍性
 によって秘められたこうした世界措定[Weltsetzung]や存在繫縛[Seinsbindung]に気づ
 かない。我々がこうした繫縛[Bindung]を自覚しそれを働きの外に置き、それとともに
 にまた、諸変項のきわめて広範な周囲の地平[Umgebungshorizont]を一切の繫縛から
 一切の経験的妥当から解放する場合にのみ、我々は、完全な純粋性を創造する。我々
 は、その場合、いわば純粋空想世界の中に、絶対的に純粋な諸可能性の世界の中に
 いる。あらゆるそのような可能性は、その場合、任意性という様態での可能な純粋
 なヴァリエーションにとっての中心項[Zentralglied]でありうるものであり、あらゆるそ
 のような可能性から或る絶対的に純粋な形相が明らかになるのであるが、しかし、
 あれこれのヴァリエーションの系列が、記述された仕方での或るヴァリエーション
 の系列に結び付けられる場合にのみ、あらゆる他の可能性から同一の形相が明らか
 になるのである。かくして、色や音に対して、さまざまな形相が明らかになるので
 あり、それらは別の種類であり、しかもそれらの純粋な種に関してそうなのであ
 る」⁽¹¹⁾。ここで、形相的ヴァリエーションは、空想力によって範例としての原像から
 空想像としての模像を産出する模造的形成を行い、諸変項を貫く一般的本質とし
 ての形相を把握することであると説かれている。そして、同時に、形相的ヴァリエ
 ーションは、形相的現象学的態度における空想力によって自然的態度における世界措
 定や存在繫縛を乗り越えて空想世界としての可能性の世界に身を置くものであると
 説かれている。その事は、納得されうるが、形相がプラトンの意味でのアイデア
 であると言われている点は、納得されがたい。やはり、形相は、アリストテレス的
 な意味で把握されねばならない。フッサール自身、その記述の仕方に曖昧性を含ん
 でいる。なぜなら、形相は一切の形而上学的解釈を免れて純粋に把握されると言わ
 れる一方で、形而上学的解釈の途上で生じる理念観取において我々にとって直接的に直
 観的に与えられると言われているからである。

フッサールが形相をアリストテレス的な意味で把握することなくプラトンのイ
 デアとして把握するという誤りは、他の箇所でも見られる。形相的ヴァリエ
 ーションにおける形相の把握の仕方は、「押し被せ的一致における通覧[*das Durchlaufen in
 überschiebender Deckung*]と一般的なものをそこから観取すること[*das Herausschauen
 des Allgemeinen*]」⁽¹²⁾による。押し被せ的一致における通覧とは、模造的形成によつ

て諸変項を産出していく際にのちに形相として明らかになる一般的本質の内実が一致する同一性として貫かれるとともにそれとは異なる異質の諸内容が分離されるような通覧のことである。だから、押し被せ的一致における通覧の過程で、一般的なものがきわだってきて形相として観取されるというわけである。こうした押し被せ的一致における通覧と一般的なものをそこから観取することに関して、フッサールは、次のように記述している。「赤という形相は、この赤やそれと一致する何らかの赤に属する無限に可能な個別性に対して一つである、と繰り返して言うとするれば、我々は、まさに我々の意味での或る無限なヴァリエーションを基底[*Untergrund*]としてもっている。その無限なヴァリエーションは、形相に不可分の相関者として属するものを、いわゆる形相の範囲[*Umfang*]を提供するのであり、〈純粹に概念的な本質〉の範囲を提供するのであり、無限に可能な諸個別性を提供するのである。無限に可能な諸個別性は、形相に属し、形相の〈個別化[*Vereinzelungen*]〉であり、プラトンの言えれば形相に対して分け前にあずかるという関係にあり、あらゆる個別的なものはそもそも本質や本質の諸契機の分け前にあずかるということでもあるように、個別的なものの本質としての形相に関係づけられた個別的なものとしてある。この場合、相関において、一方で、一般的なものそのものが観取されうるのであり、他方で、全体性としての範囲が、しかしまた何らかの個別的なもの一般が観取されうるのである。……押し被せ[*Überschiebung*]によって、あちこちの同じものは、異なるものからきわだたされる。しかし、多様性においてと同様に、具体的な個別的諸対象は、多数から分離されるのであり、そこではやはり、諸対象を押し被せ的一致へもたらすという精神的操作は、何ものをも変えないものと言えようし、その際に気づかれるようになる同等性の諸契機と異なる諸契機もまた、分離されるものと言えよう」⁽¹³⁾。ここでも、フッサールは、形相に不可分に相関する形相の範囲としての無限に可能な諸個別性と形相との関係を、プラトンの分有の関係として捉えている。諸対象を押し被せ的一致へもたらすという精神的操作における形相の把握は、イデアの把握としての理念観取の意味に捉えられてはならない。

フッサールが形相をアリストテレス的な意味で把握することなくプラトンのイデアとして把握するという誤りは、類や種の段階的推移についての学説の記述においても見られる。そこで、形相的ヴァリエーションにおける類や種の段階的推移についての学説の記述を見てみよう。「或る任意の赤から出発し或るヴァリエーションの系列において進行しつつ、私は、赤という形相を獲得する。我々が範例的出発

点とは別の或る赤をもつとすれば、我々はなるほど直観的に或る他のヴァリエーションの多様性を獲得するであろうが、しかし、あのものはこのものの地平に属するというように、この新たなものは先行するもののさらなる継続という開かれた地平に属するというように、我々は、直ちに気づくであろう。そして、我々は、形相が同一のものであるということに気づく。私が任意の赤の代わりに或る任意の緑にヴァリエーションを施し緑という形相へ至った場合も、もちろん同様である。他方で、それにもかかわらず、異なるヴァリエーションの系列が或る一定の仕方で赤をもたらし緑をもたらし或るより一層包括的なヴァリエーションの多様性へ再び結合しうるということが、つまり、異なるヴァリエーションの系列がもはや赤の形相ないし緑の形相をもたさず色一般という形相をもたすような或る唯一のヴァリエーションへ再び結合しうるということが、見て取られる。その事は、どのように理解すべきなのか。その答えは、次のとおりである。すなわち、私がヴァリエーションを施しながら赤の観取へ至ることになる場合、私は、赤へ向かうことを中断しなければならないし、あるいは、ヴァリエーションの遂行の一切のその他の恣意の下で或る仕方で結び付かなければならない。つまり、ヴァリエーションの始まりにおいて或る共通の赤が私に照らし出されると、私は、それを直ちに確定しうるのであり、何ら他のものを思念しえず、赤一般として、任意のさらなるヴァリエーションの下でこの共通の同一的なものをもたすであろうものとして思念しようとする。それゆえ、緑が私に直面すると、私は、そのうちには属さないものとして、観取されその後も志向される赤に対して抗争するものとしてそれを退ける。他方で、しかし、たった今退けられた緑の変項があらゆる赤の変項と抗争中であり、それでもやはり或る共通のものをもっており、それゆえまた或る一致点をもっているということに、私が私の関心を向ける場合、この新たな共通のものは、今や純粋な形相として把握されてヴァリエーションを規定しうる。今や、ヴァリエーションの多様性は、赤に対しても緑に対しても黄等々に対しても一つになって共属する。それゆえ、一般的なものは、今や色である。したがって、私は、今やもとより全く拘束されない仕方で、それゆえ何らかのすでに照明された一般的なものへの結び付きなしにヴァリエーションを施し、一切のそこから観取されて限定される一般性に関して存する一般的なものを追究することに照準を合わせることができよう。一切のそこから観取されて限定される一般性とは、我々の例では、赤、青、黄、等々の一般性に関して最高の一般性として存する。それゆえ、この場合、ヴァリエーションがそもそもヴァ

リエーションであり、それゆえそもそも一貫して統一的な一致の総合へ一貫して一般的なものとともに統合されるかぎり、ヴァリエーションは無関心に進行するということが、要求される。それゆえ、それは、とりわけ最高の類が具体的な類である場合諸領域[Regionen]を意味するような最高の類としての最高の本質一般性の構成への道である。その場合、この一般性が自己に関していかなる高次の一般性もはやもたないということは、明らかである。そして、他方で、そうした一般性は、このヴァリエーション全体の中でそこで汲み取られうるような——それというのも、同一のものの限定されたヴァリエーションの領域に属するから——一切の特殊な一般性のうちに理念的に共通のものとして含まれるという特性を、同時にもっている。赤、緑、等々の諸理念は、色という理念への理念的分有[ideale Anteilhabe]をもっている。我々は、明らかにまた次のように言う。すなわち、諸理念、諸々の純粋な形相は、それ自体また諸変項としても機能しうるし、それらに基づいて高次の段階で再び或る一般的なものそこから観取されうるのであり、諸理念に基づく或る理念あるいは諸理念についての或る理念、諸理念がその範囲を成し間接的に初めてその諸々の理念的個別性を成すような或る理念がそこから観取されうるのである。今や、ここが、イデアチオン[Ideation]の学説の或る重要な拡張を直ちに付言するための場所である。我々は、経験世界[Erfahrungswelt]に関心を抱いていたし、経験の形相[Eidos der Erfahrung]に関心を抱いていた。だから、我々は、それが他の諸理由からも良いものであり当然であるように、経験の所与性から出発してあるいはその主導像が端的な経験の所与性であったような諸変項から出発して進行した。しかし、我々は、今や、形相の第一段階つまり端的な経験に関する形相の第一段階が登られるや否や、或る形相もまたヴァリエーションを施しうるということにはっと気づいた。言い換えれば、理念観取[Ideenschau]は、そのうちで或る新種の対象性つまり一般的なもの自体所与となるような或るもちろん高次の能動的に産出する意識であるかぎり、それ自体端的な経験の或る類比物なのである⁽¹⁴⁾。ここで、形相的ヴァリエーションにおける類や種の段階的推移の学説が記述され、相対的に低次の段階の諸理念は相対的に高次の段階の或る理念にとっての諸変項として機能することが説かれている。そこには、フッサールの言う「イデアチオンの学説の或る重要な拡張」が秘められている。つまり、それは、端的な経験に関する形相の第一段階を基礎にしてそれ自体端的な経験の或る類比物である理念観取が成立するということである。フッサールは、端的な経験に関する形相の下位段階の諸理念としての形相がそ

の上位段階の或る理念としての形相を分有するというふうには形相をプラトンのなアイデアとして捉えているが、形相的ヴァリエーションにおける形相は、形相の諸段階に対応する諸領域つまり経験世界の諸領域に根ざす「経験の形相」である。したがって、1925年夏学期講義「現象学的心理学」の形相的ヴァリエーションにおける形相の意義のフッサールによる把握は、誤りだと言わなければならない。

形相をアリストテレス的な意味で把握することなくプラトンのなアイデアとして把握するという誤りにフッサールが気づくのは、この1925年夏学期講義からわずか2年後の1927年のことである。したがって、その問題については、次の第3節で考察することにしよう。

（3）形相的ヴァリエーションにおける形相の真の意義の把握

ディルク・フォンファラは、フッサールが1927年夏学期の或るテキストにおいて「一切の理念つまり一般的本質がアイデア化的抽象によって生じるわけではない」ことを認めていることを指摘している⁽¹⁵⁾。それは、どういうことであろうか。そのテキストに即して考察しよう。

フッサールは、1927年夏学期の或るテキスト「事物の無限な経験を前にして事物に関するアприオリな判断はどのようにして可能であるのか？ 客観的概念形成および客観的に妥当する判断の問題」の或る箇所ですべて述べている。「数学[mathesis]に対して、次のように言われうる。私は、数学においても、この場合問題とならないものつまり特殊な意味での〈分析的なもの〉と、問題となるものつまりそれに属するアприオリを伴う総合の無限性を、区別しなければならない。カントがそもそも必要とする分析的なものの概念を我々が取り上げると、カントがヒュームの問題を解決しようとするかぎり、カントがそもそも必要とする分析的なものの概念は、確固たる観念および諸観念の関係というヒュームの概念である。そして、カントの〈諸概念〉に関しては、それゆえ、カントの諸概念は、〈形式〉論理学的意味での単なる意味として考えるべきではない。カントの考えを的確に捉えるために、我々は、次のように言わなければならない。すなわち、私が場合によっては可能な〈直観〉によって明らかにするものが〈概念〉のうちに分析的に存するが、しかし、その際にまた、私は、直観およびそのうちで捉えられる一般的なものの内実を越えて行ってはならない。その背後には、次のような事が存する。すなわち、直観は、何

か限定されたものである、ということである。一般的直観（カントが哲学的思索を行うであろうもの）あるいはその完全な概念的判明性および明晰性において個々の範例に即して単一の（個別的）直観のうちに捉える概念は、範例のうちに実際に直観されるものに依拠せざるをえないし、そして、範例のうちに実際に直観されるものを一般的に捉えなければならない⁽¹⁶⁾。ここで、直観的に捉えられるものの概念を分析する際に、直観およびそのうちで捉えられる一般的なものの内実を越えて行ってはならないことが説かれ、直観のうちに捉える概念は、範例のうちに実際に直観されるものに依拠して一般的に捉えなければならない、と説かれている。そして、フッサールは、この箇所注を付して次のように述べている。「それは、ヒュームの感覚主義に基づいて理解されうるように、十全な内在的直観、内在的印象あるいは擬似印象（空想）であり、そして、その上に基礎づけられるイデアチオンが、内在的本質をもたらす。しかし、その事は、こうしたヒュームの領域にかかわるだけではない。或る判断は、思念や意味として判明性という明証において十全に与えられるが、しかし、或る理念であり、やはり、個別的な内在的所与の内在的印象から汲み取られるような或る一般的本質ではない。一切の理念が、イデア化的抽象に由来する一般的本質であるわけではない⁽¹⁷⁾。ここで、直観に基づく概念の把握が直観の内実に依拠しなければならないように、イデアチオンないしイデア化的抽象による一般的本質としての理念の把握も内在的直観の内実に依拠しなければならないが、イデアチオンないしイデア化的抽象による一般的本質としての理念は形式論理学的次元の判断のような理念とは異なるものであることが説かれている。形式論理学的次元の判断のような理念は、直観的内実としての範例的な経験的内実から乖離した理念つまりプラトンのようなイデアとしての理念と言わなければならない。それに対して、イデアチオンないしイデア化的抽象による一般的本質つまり形相としての理念は、直観的内実としての範例的な経験的内実から汲み取られる理念であり、アリストテレス的な意味での形相としての理念と言わなければならない。

第1節においても言及されたように、フッサールは、1917-18年に、より一層高次の一般性つまり種や類のような一般的本質とは区別して最低次の本質ないし最初の本質つまり最下位の一般性としての具体的本質にとりわけ取り組み、形相的ヴァリエーションの際の自由な空想において産出される諸可能性は、経験によって理性的に妥当するものとして予示され、それとともに経験にいわば拘束されていることが、明らかにされた。そこでは、個体を個体として認識する経験の個体化の場面で働く

形相的ヴァリエーションによって観取されるアリストテレス的な意味での形相が、事象的にはすでに捉えられていた。そうした経験にいわば拘束された理念としてのアリストテレス的な意味での形相に関する思想の延長線上に、1927年夏学期のこのテキストの形相的ヴァリエーションにおける形相の真の意義の把握が成立しているものと言える。つまり、もちろんフッサールはアリストテレス的な意味での形相について明言しているわけではないけれども、フッサールは、事象的に見れば、「直観的内実としての範例的な経験的内実から乖離した理念つまりプラトンのなアイデアとしての理念」と「直観的内実としての範例的な経験的内実から汲み取られた理念つまりアリストテレス的な意味での形相としての理念」を明確に区別しており、形相的ヴァリエーションにおいて観取される形相の真の意義つまりアリストテレス的な意味での形相の意義を把握したものと言える。したがって、フッサールは、1927年には形相的ヴァリエーションにおける形相の真の意義をアリストテレス的な意味において把握したものと言える。

（４）「1928年のアムステルダム講演」における現象学的心理学の深化

第3節で見たような1927年夏学期におけるフッサールによる形相の意義の把握によって、その後のフッサールの現象学的心理学の展開に何らかの変化は見られるのか。実は、その翌年の1928年4月にフッサールによって行われたアムステルダム講演において、フッサールの現象学的心理学の深化が、見いだされるのである。そこで、これから、「1928年のアムステルダム講演」に即して考察しよう。

フッサールは、アムステルダム講演の或る箇所ですべて述べている。「今や、我々は、現象学的首尾一貫性および純粋に操作される経験において統一として解明され、しかも現実性および可能性として解明されるような純粋な間主観性の領野の露呈によって、或るアприオリな学問つまり或る自己完結したアприオリな純粋現象学的心理学が確立しうる、ということをあらかじめ語った。しかし、ところで、現象学的アприオリへどのようにして至るのか。この場合、我々は、或る熱狂的な論理学的神秘論を考えてはならない。純粋アприオリの獲得の方法は、或る全く事物に即した[nüchtern]全面的に周知の全学問において取り扱われる方法であり、……この方法の反省的解明と究極的な意味解釈は、一切の認識方法に対してと同様に純粋現象学によって初めて成し遂げられうる。それは、自由な諸事実を全面的に共に措定すること

によって純粋な一般性を必自然的に洞察的に獲得するという方法であり、純粋に可能な事実としての自由に考えられうるかぎりの可能性の無限の範囲へ関係づけられながらその範囲に対して可能的事実として考えられうることという規範をまさに必自然的に定めるという方法である。そのような純粋な一般性は、厳密に論理的な方法に由来するものではないにせよ、そこでは他のようには考えられえないことがいつでも矛盾が生じることによって吟味されうるような自明性である。したがって、自然の領域には、次のような洞察が存する。すなわち、あらゆるものは純粋可能性として直観的に表象可能ということであり、あるいは、我々は言うのだが、考えられうる事物は質料的な事物という時空的因果的根本特性をもち、空間形態や時間形態や時空的状態等々をもつということである。我々は、そのような事をどこから知ることか。今や、我々は、何らかの事物範例から例えば事象的経験から出発するが、しかし、事実性を重要でないものとして働きの外に置き、我々はそのつどの範例において自由な空想ヴァリエーションを行使し、自由な任意性の意識とそのように任意に産出可能な諸変項の地平を作り上げる。しかし、それは、おおまかな定式にすぎず、より一層深い研究は、それが領域的一般性[regionale Allgemeinheiten]に対してのみ対応する精確な解釈において適合する、ということを示す。その際に、諸変項の絶えざる自己一致において一貫した一般の本質形式が現れるのであり、一切の諸変項を貫いて必然的に保持される不変のものが現れるのである。そして、その不変のものは、事象的に直観的に産出される諸変項の事象的な共通のものとしてだけでなく、任意性において進行するヴァリエーション〈一般〉の不変のものでもある。経験のあらゆる事物事象は、それがそのように直観的に遂行されるべき自由なヴァリエーションの主題であるかぎり、こうしたとても自然的な方法論[sehr natürliche Methodik]において明証的に現れる必然的で全く不動の形式様式つまり事物一般という領域の形式様式をもっている。まさに、同様に、我々は、明らかに、現象学的経験あるいは経験可能性から出発して自由なヴァリエーションを行使し、純粋で必然的なもの一般まで登りながら現象学的主観性の全く不変の様式をノエシスおよびノエマ一般等々を伴う純粋自我や自我共同体一般や意識生一般の全く不変の様式として画定しうる。それゆえ、こうして、現象学者は、解明する経験の方法としての現象学的還元を絶えず遂行するだけでなく、〈形相的還元[eidetische Reduktion]〉をも遂行する。現象学は、現象学的経験の継続的に統一される領域に関係づけられて普遍的学問となるのであるが、しかし、こうした領域の不変の形式様式を、こうした領域の無限に豊富な構造アプリアリを研究するという主題を

伴っており、間主観性の内部での個別的な主観性および間主観性そのものとしての純粹主観性のアプリアリを研究するという主題を伴っている」⁽¹⁸⁾。ここで、現象学的心理学における形相的ヴァリエーションは、経験のあらゆる事物事実を主題とし、純粹に可能な事実としての自由に考えうるかぎりの可能性の無限の範囲に関係づけられており、事物に即した現象学的アプリアリとしての形相を獲得する方法である、ということが説かれている。そして、現象学的心理学は、日常生活が営まれる実在的次元としての自然的次元に成立するようなどとも自然的な方法論に基づく学問であり、現象学的還元とともに形相的還元を遂行する学問である、ということが説かれている。さらに、現象学的心理学によって獲得されるべき純粹な一般性は、アリストテレス的な意味での形相としての一般性であり、厳密に論理的な方法に由来するプラトンの意味でのアイデアとしての一般性ではない、ということが確認されている。

したがって、1927年夏学期に形相の意義を把握したフッサールは、1928年には質料的な事物から成る自然の領域の一般性つまり領域的一般性に対してのみ形相的ヴァリエーションを適合させるという形で現象学的心理学を事実即したより一層具体的な実証的学問にしている点で、現象学的心理学を深化させたものと言える。そして、第1節でも言及されたように、フッサールは、1926年に自我のヴァリエーションと世界のヴァリエーションに関する両者の同時発生テーゼに基づく形相的ヴァリエーションを行使し始めたわけだが、1928年には「事物領域一般という領域の形式様式」の解明と「純粹自我や自我共同体一般や意識生一般の全く不変の様式」の解明という両解明の同時進行によって同時発生テーゼに基づく形相的ヴァリエーションをより一層具体的に行使する点でも、現象学的心理学を深化させたものと言える。

結 語

本論は、第1に、現象学的心理学の方法としての形相的ヴァリエーションをめぐる歩みをさまざまな観点から考察した（第1節）。第2に、1925年夏学期講義「現象学的心理学」の形相的ヴァリエーションにおける形相の意義のフッサールによる把握が誤りであることを指摘した（第2節）。第3に、フッサールは、1927年には形相的ヴァリエーションにおける形相の真の意義をアリストテレス的な意味において把握したものと言える、ということを示した（第3節）。第4に、フッサールは、1928年には質料的な事物から成る自然の領域の一般性つまり領域的一般性対

してのみ形相的ヴァリエーションを適合させるという形で現象学的心理学を事実
に即したより一層具体的な実証的学問にし、また、「事物領域一般という領域の形式
様式」の解明と「純粹自我や自我共同体一般や意識生一般の全く不変の様式」の解
明という両解明の同時進行によって同時発生的テーゼに基づく形相的ヴァリエー
ションをより一層具体的に行使する点で、現象学的心理学を深化させたものと言え
る、ということを明らかにした(第4節)。

注

- (1) Vgl. Husserl, E., Zur Lehre vom Wesen und zur Methode der eidetischen Variation. Texte aus dem Nachlass (1891-1935). hrsg. v. Dirk Fonfara, Husserliana, Bd. XLI(以下、Zur Lehre vom Wesen. と略), 2012, S. XXVII.
- (2) Vgl. *ibid.*, S. XXVII.
- (3) Vgl. *ibid.*, S. XXVIII f..
- (4) Vgl. *ibid.*, S. XXIX~XXXI.
- (5) フォンファラは、このテキストの成立を編者序文では1919年としているが、のちの本文に収められたNr.18のテキストの212頁の欄外注(2)では「おそらく1918年1月または2月」の成立としている。本文に収められたNr.18のテキストは、ベルギーのルーヴァン大学附属フッサールアルヒーフの整理番号では「A III11,14-17」となっている遺稿であり、筆者も実際にその遺稿を閲覧したが、1919年の成立ということによいと思われる。
- (6) Vgl. Zur Lehre vom Wesen. S. XXXI.
- (7) Vgl. *ibid.*, S. XXXI f..
- (8) Vgl. *ibid.*, S. XXXII.
- (9) Vgl. *ibid.*, S. XXXIII.
- (10) *Ibid.*, S. XLIII.
- (11) Husserl, E., Phänomenologische Psychologie. hrsg. v. Biemel, W., Husserliana, Bd. IX(以下、Phänomenologische Psychologie. と略), 1968, S. 72~74.
- (12) *Ibid.*, S. 79.
- (13) *Ibid.*, S. 79~80.
- (14) *Ibid.*, S. 81~83.
- (15) Vgl. Zur Lehre vom Wesen. S. XXX.

- (16) Ibid., S. 170.
- (17) Ibid., S. 170, Anm. (1).
- (18) Phänomenologische Psychologie. S. 322~323.

（ほり・えいぞう 大分工業高等専門学校一般科文系教授）